山行報告書

通算山行NO	NO・133S・A1・A2	報告者	御宿さよ
年月日	'98年 9月11日（金曜日）～	年 9月13日（日曜日）	
山行名	初秋の南アルプス	天候	晴
山名	北岳（3,192m）・バットレス・間の岳（3,189m）・農鳥岳（3,025m）		
この山のセールスポイント	白峰三山の山岳展望を欲しいまま		
コース及びタイム	裾野13:23 ⇨富士吉田ＩＣ14:23 ⇨甲府昭和ＩＣ15:10 ⇨R20⇨南アルプス街道⇨広河原ロッジ駐車場17:05 ～大樺沢吊り橋～広河原山荘17:30 消灯21:00		
参加者	バットレス隊	後藤隆徳(51)・ 加藤秀子(49)	
	縦走隊（A1）	大根田元男(62)・来生博子(49)・岡栄一(64)・渡辺真理子(48) 勝又とし江(51)・近藤孝子(57)渡辺幸子(49)・御宿さよ(53) 高岡八千代(60)	
	/11 日後続隊	堀合喜義(49)・山本正昭(49)・水落京(49)	
	北岳往復（A2）	三上秀子(55)・鈴木光世(56)・現地参加 清水准一 他1名	
		会員１７名 ・ 一般２名 ・ 合計 １９ 名	

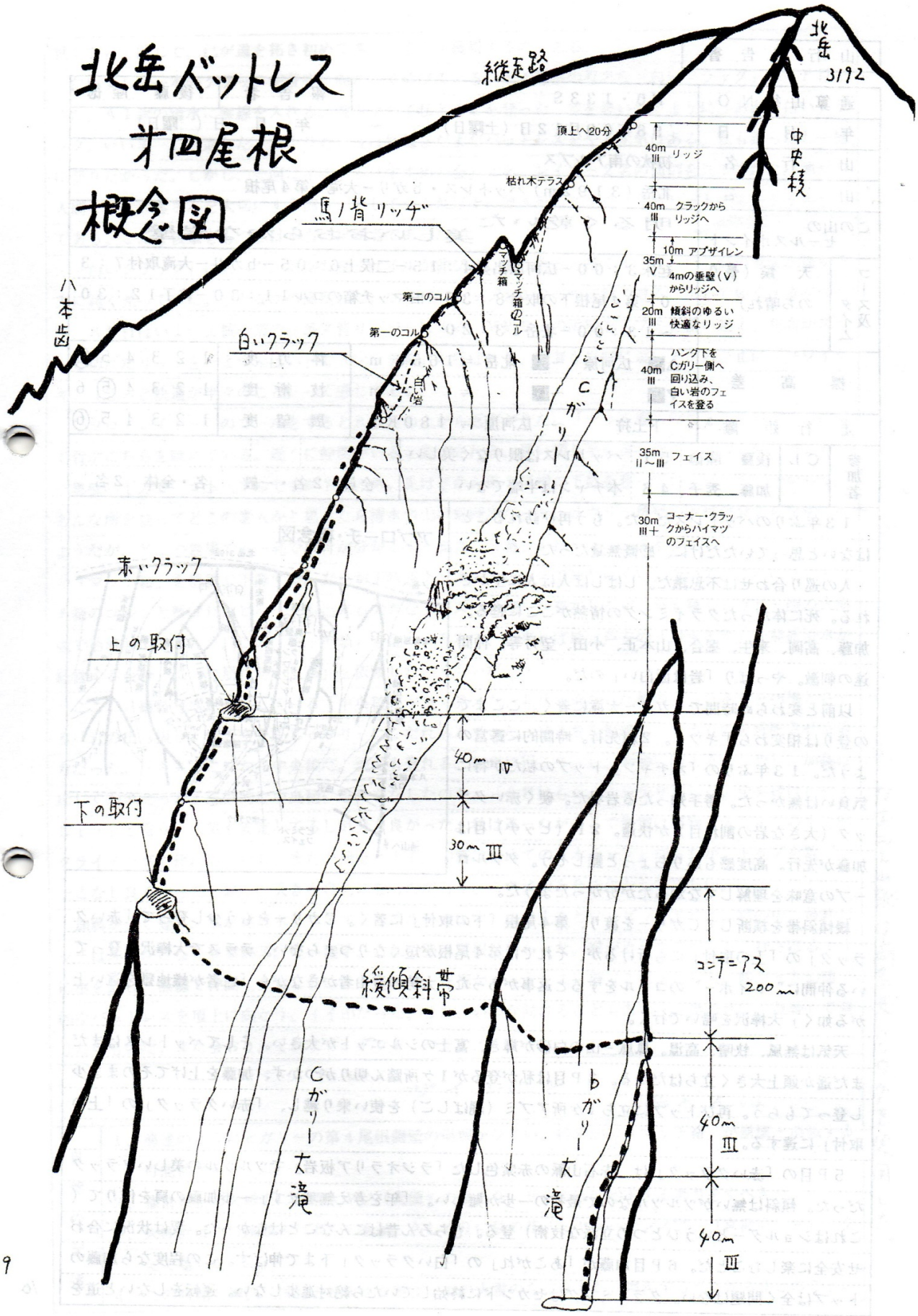
日本百名山を２日間で三山登れる喜びと、期待と不安を一杯に２台のワゴン車で裾野を出発した。仕事の関係で夕刻出発の堀合・山本・水落を残して、１台は後藤会長が、１台を加藤が運転した。私は幸か不幸か加藤の車に乗り合わせ、おまけに勝又（と）が乗っている。車の中はご想像のとうり大きな声のおしゃべりと笑いでパンパンに膨れ上がった。その上、料金所のおじさん達迄笑わせながら着いた所は白根町六科。甲府の清水さんが塩原写真館の前で待っていてくれた。 ムジナ

暫しの休憩をとり、鳳凰三山を遠くに眺めながら南アルプス街道に入る。左側が切り立った狭い道路で、４台のトラックと行き違い加藤の見事な運転技術で命拾いした。崖の上から岩シャジンが紫の花を見せてくれた時は、車の天井が抜ける程感激の声でいっぱいだった。

広河原ロッジの駐車場に着くと平日とあって、他の車はチラホラ。会長と加藤は明日のバットレスに備えテントを一張り。後続の３人の為にも一張りの準備を。我々１１人は大樺沢吊橋を渡り広河原山荘へ向かった。夕食にバットレス隊と合流し山荘の御馳走、豚のショウガ焼きをナイフとフォークで食べ賑やかな声に、宿の主人から電話の声が聞き取れないと注意をうけた。多少の酒も入り会長が隣の男性３人組に話かけているうち、会長のショウガ焼きが何故か塩辛くなり、お開きの頃ショッパイ、ショッパイを連発。会長、テントの中で水をガブ飲みした？かどうか。

やれやれ賑やかな１日も終わり、明日の天気も良さそうと静かに消灯。後続の３人は２３時頃にテントに到着したとか。お疲れ様でした。 自然の記述：岩シャジン・セキヤのアキ丁子

北岳バットレス 才四尾根 概念図

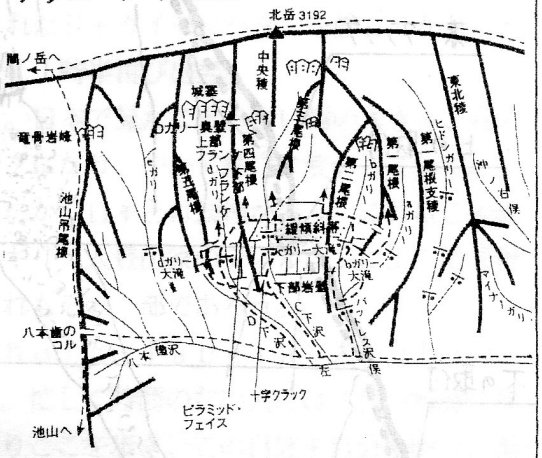


山行報告書

通算山行NO	N0・133S	報告者	後藤　隆徳
年　月　日	'98年09月12日（土曜日）　～　年　月　日（　曜日）		
山行名	初秋の南アルプス		
山名	北岳（3192m）バットレス・bガリー大滝～第4尾根		
この山のセールスポイント	明るく乾いた　美しいおおらかな岩壁		
コース及タイム　天候（曇りのち晴れ）	起床3：00－広河原出発4：15－二俣上6：05－bガリー大滝取付7：30－第4尾根下の取付8：35－旧マッチ箱のコル11：30－終了12：30～13：00－北岳13：20		
標高差	△S 広河原 ～T 北岳 ≒1666 m	体力度	1 2 3 4 5 ⑥
	▼T ～G ≒ m	技術度	1 2 3 4 ⑤ 6
走行距離	下土狩 ～ 広河原 ≒ 180Km	展望度	1 2 3 4 5 ⑥

参加者					
	CL	後藤　隆徳	51	バットレスは限りなく美しい	
		加藤　秀子	48	本チャンは半端でない	会員　2名・一般　名・全体　2名

アプローチ・概念図



13年ぶりのバットレスだった。もう再び訪れることはないと思っていただけに、感慨無量だった。

人の巡り合わせは不思議だ。しばしば人は人に生かされる。死に体だったクライミングの情熱がここに甦る。加藤、高岡、来生、堀合、山本正、小田、望月等、仲間達の刺激。やっぱり「岩は面白い」のだ。

以前と変わらぬ時間でbガリー大滝に着く。ここまでの登りは相変わらずキツイ。2組先行。時間的に露営のようだ。13年ぶりの「本チャン」トップの私だが特に気負いは無かった。勝手知ったる岩場だ。硬く赤いクラック（大きな岩の割れ目）が快適。2P（ピッチ）目は加藤が先行。高度感もありちょっと難しそう。ダブルロープの意味を理解してなかったが分かったようだ。

緩傾斜帯を横断してCガリーを渡り、第4尾根「下の取付」に着く。Cガリーをもう少し登って「赤いクラック」の「上の取付」にも行けるが、それでは第4尾根が短くなりつまらない。テラスで大樺沢を登っている仲間に”レイホー”のコールをすると返事があった。大勢の登山者がさながら「亡者が蟻地獄を這い上がる如く」大樺沢を喘いで行く。

天気は無風、快晴、高温。鳳凰三山の白砂が輝き、富士のシルエットが大きい。そしてバットレスはまだまだ遥か頭上大きく立ちはだかる。3P目は私が登るが1ケ所踏ん切りがつかず、加藤を上げてそのまま少し登ってもらう。再びトップに立ち1ケ所アブミ（縄ばしご）を使い乗り越し、「赤いクラック」の「上の取付」に達する。

5P目の「赤いクラック」は、赤石山脈の赤紫色した「ラジオラリア板岩」でツルツルの美しいクラックだった。傾斜は無いがツルツルなので最初の一歩が難しい。「年を考え無理せず」一歩加藤の肩を借りて（これはショルダーというひとつの立派な技術）登る。もちろん昔はこんなことはなかった。要は状況に合わせ安全に楽しむことだ。6P目加藤が「あこがれ」の「白いクラック」下まで伸ばす。この程度なら加藤のトップは全く問題はない。クライミングはセカンドに終始していたら絶対進歩しない。運転をしないと道を

覚えないと同じで、己が道を拓き初めて多くのものを獲得するのである。

白い美しい一本のクラックが蒼空に向かって伸びている。第４尾根の有名な「白いクラック」が７Ｐ目だった。Ａ１隊の清水に無線を入れる。彼もかつて私とここを登った。昔を思い出すように「ああ、白いクラック。いいネー」と返した。私より若い彼は無論まだまだバットレスをやる元気はある。私も誘ったし一緒に登りたかった。しかし、今回は主宰する「すずめの会」２名、レイホー２名の面倒を見てくれた。地元の人間としてお客さんを大切にする部分、そして、それ以上に他人のことを思いやるハートのあるイイ男なのである。こんな後輩をもつ私は本当に果報者であった。

「白いクラック」に入った。気持ち良くザイルが伸びる。振り返ると遅くまで残った二俣の雪渓が遥か下方に鈍く光っていた。なかなかの高度感だ。ツルベ（トップを１Ｐづつ交替で登ること）で短く加藤がつなぎ、８Ｐ目はいよいよ核心部の「馬ノ背リッジ」に入る。Ｖ級５ｍの垂壁をアブミを使い越え、左右がスパッと切れたリッジを「よつんばい」で「マッチ箱」と呼ばれる、顕著な岩峰に這い上がる。正に「コワイテキ」（恐いと快適が半々のこと）って感じである。

”ヨロ・レイホー”のコールをすると八本歯の上から返事がきた。「マッチ箱」のちょうど真横の登山道で皆がこちらを眺めている。近くに仲間がいると励まされる。思い切り手を振った。その時、眼下のｄガリー奥壁の下方で”ゴトーさんですか？”の声。先ほどから第５尾根の下部を登っているパーティーからで、あんな所を登ってどこの素人かと思ったら清水労山の殿岡氏だった。ｄガリー奥壁の取付が分からなかったようだが、どこの岩場でも一発で取付が分かるまで相当「月謝」を払うものである。

「マッチ箱」を懸垂で下降する。支点が下降点よりズレているので降りにくい。かつて、ここには「マッチ箱のコル」と呼ばれたビバークも出来る大きなテラス（岩棚）が存在したが、今も続くｃガリー側の大崩壊で消滅してしまった。この「マッチ箱」も危うい存在で、出来れば地元芦安の「清水工設」（前述清水が経営する会社）に「岩崩れ防止工事」を依頼したいくらいだ。

ここから継続登攀を予定している「中央稜」が良く見えた。北岳の頂から巨船の「へさき」を彷彿とさせる「岩の出っ張り」が天空を圧しｃガリーになだれ込んでいた。登る者を拒絶し、見るものを感服させる迫力だった。「さあ、これから中央稜だ。誰でも登れる。気楽に行こう。」と加藤に伝える。しかし、加藤は珍しく弱気だった。圧倒的な中央稜に恐れをなしたのか、「今日はもう、十分やりました。中央稜は止めましょう」と言う。天気も安定してるし気分も良かった。私は迷ったがここで無理は禁物。久しぶりの本格的クライミングで疲れもしたし、またの機会とする。加藤は初めての「本チャン」だったが、トップを数ピッチこなし良くやったと思う。大きな自信になっただろう。この経験を今後生かして欲しい。

加藤が少し登り、私が枯れ木テラスまでザイルを伸ばす。この上あとワンピッチで終了。霧の中、最終ピッチは加藤がこなし無事終了。堅い握手。これで第４尾根は終わった。喉がカラカラだった。むさぼるように水を飲む。無線で仲間に完登したことを伝える。祝福がバットレスに谺（こだま）した。霧が湧き幻想的なバットレスを頂上に向かう。イイ山だった。また、いつか訪れることもあろう。出来れば「還暦」で登りたいものだ。また会おう。それまで、グッド・バイ・・・。

バットレス　ザイルにとまる　赤とんぼ

自然の記述	
	1、前述のようにｃガリーの第４尾根側壁の崩壊がひどい。将来的に「マッチ箱」が崩壊・消滅する可能性がある。
	2、幕営禁止の大樺沢に結構大キジ（大便）の後あり。せめて穴に始末する努力をすべきだ。
	3、大樺沢はこの時期花が多くて感激。久しぶりに私の花「ミヤマハナシノブ」（宮間原　忍）に会えて嬉しかった。
	4、この時期大樺沢二俣付近の大きな雪渓。春の大雪のなごりとか。越年する可能性ありとのこと。

※なお登山靴は両名共ハンワグを使用した。

パットレスへの道・最終回

かとう　ひでこ

九月の東北山行がキャンセルとなり、念願の北岳山行＆パットレスを計画。『やった！今までの訓練が試せる』と、心の中で密かに飛び上がって喜んだ。今年は岩の訓練、沢登りを意欲的に取り組んだ。その結果がパットレスに繋がった。

朧月夜がボンヤリと照らす大樺沢を、ヘッドランプの光芒を頼りに黙々と歩く。思えば今から2年半前、96年1月　県連30周年記念交流ハイクで、各山岳会が沼津アルプスに結集した。その頃の私は、某山の会に所属はしていたものの、山にさして興味はなく年1～2回のハイキング程度のものしか参加しない幽霊会員であった。縁とは不思議なものです。たまたま勤め先の会社の近くに、山の好きな女性がいてこの交流ハイクに誘われた。

アップダウンのきつい沼津アルプスに閉口しながら、やっと着いた頂上に、腕組みをして仁王立ちで待っていたのが今の会長である。ニコリともしないで『遅かったね』の威圧感のある一言。『何だ！この人は！』これが第一印象だった。私達の会は、皆が食事を始めた最後に登ってきたのだ。この出会いが私の人生を変え、山一色の毎日へとのめり込む切っ掛けとなったのである。山行のたび山への想いを熱っぽく語る会長に、何時の間にか刺激され月に1回が2回、3回が4回と回数が増え、生活に休日が無くなってしまった。その年の12月、山に登り過ぎ過労で倒れ救急車で病院に運ばれ、そのまま1週間の入院をする羽目にいたる。

懲りない私は退院2週間後には、冬山合宿に参加し聖岳に登った。雪山縦走、山スキー、春から秋は沢登り、岩登りと目まぐるしく山行に明け暮れ、オールマイティな登山を教授してもらう。ある時会長から『ただ登るだけでは意味もない。やるなら目標を持つ事だ』と言われ、大胆不敵にも雪山は5月の剣岳、岩登りは北岳パットレスと決めこんだ。『両方とも厳しいぞ！』と山を全く知らない私に、会長の口から出る言葉に容赦はない。何を聞いても『一を知って十を知れ』『何事も自分で調べろ』が一事が万事で、当たり前だが手取り足取りとは全く無縁のものだった。が、此れが又私を何クソー！と発奮させるから不思議である。

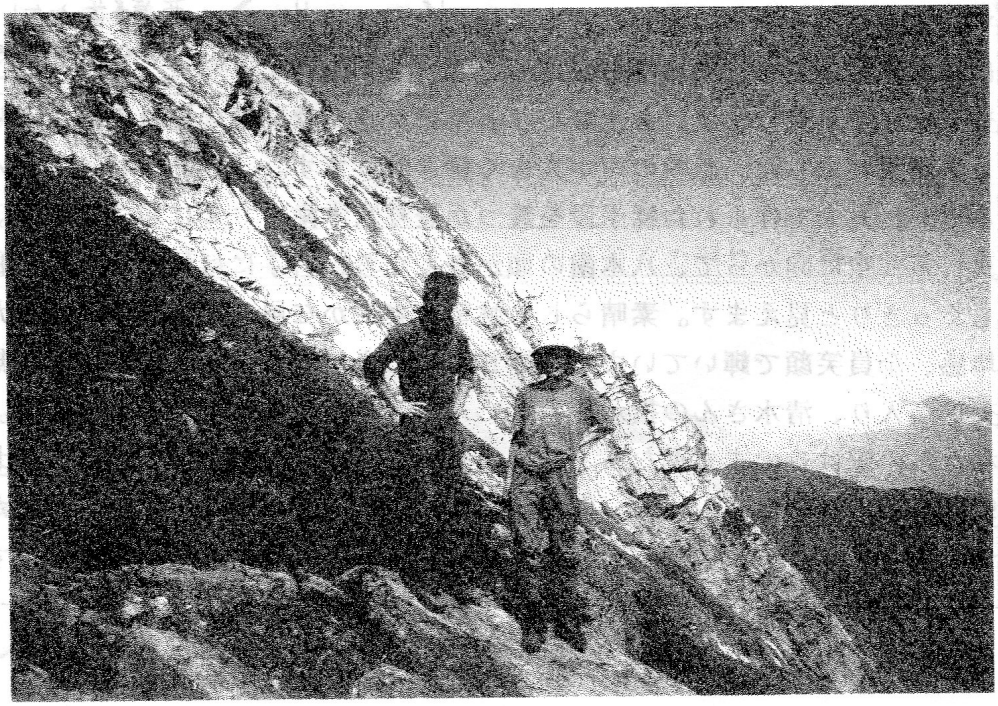
鷲頭山ゲレンデ初心者コース、城山の西南カンテ、丹沢の滝登り等訓練を重ね、鷲頭の中央クラックルートをトップで登る。そしてやっとその日がきた。其れからは、夜は畳の上で直にシュラフにくるまり、子供に『何も其処までやらなくても』と呆れられたが、で

んな所でも睡眠をしっかりとれるようにする為には、どうしても必要であった。睡眠不足では体力が続かない。

そして前夜、広河原のテントの中でグッスリとよく眠り体調は万全。天気も最高。気負いもなく平常心。ロガリー大滝取り付き迄3時間。15Kのザックを背負っての直下の急登には参ったが、四尾根の恐竜の背中～マッチ箱のコルは最高であった。『トップで行けるか？』の会長の言葉に臆する事なく岩壁にとりつく。難しいリッジ、初めてのアブミ、細いクラック、マッチ箱の頭から10mの懸垂下降。頭がクラクラする程の高度感は鷲頭山・城山の比ではない。

シュルシュルと岩を伝って引き上げられるザイルがピーンと張られ『ピーッ！』という笛の合図で登攀開始。ザイル2本に命を預ける。ピリピリと伝わる緊張感。トップの確保がまおければ即滑落だ。だが不思議と恐さはない。日々の訓練が恐さに勝ち、確保、登攀技術、何事にも平常心、学んだ事が確実に生き、そして低山では味わえない抜群の高度の中で、継続登攀する事に得も言われない喜びを手に入れる事ができた。

出発から登頂までの9時間、長いようで短い登攀は終わった。岩の面白さは言葉では言い尽くせない。自分の力量と感性で頭から手足の末端まで駆使し、ギリギリの感覚をつかむ。私は頂上を極める事よりも、頂上へ到達する迄の過程を楽しみたい。今回のバットレス継続登攀は、私のチャレンジ精神を十分満足させてくれた。一生涯忘れる事が出来ない程の経験に、今までやってきた事が無駄では無かったと実感する。お蔭様で『バットレスへの道』は無事に最終回を迎えた。ホッとするよりも終わってしまった寂しさが心に残るが、これは又始まりである。



登攀終了後 バットレスを背に